

特集

ここが知りたい！分子標的薬時代の アトピー性皮膚炎治療

—臨床試験と RWD の活用で、実臨床の未来をひらく

羅針盤

アトピー性皮膚炎の治療の 現在と未来



鎌田 昌洋

Kamata Masahiro

帝京大学医学部皮膚科学講座
教授

アトピー性皮膚炎の治療は、この数年で大きく変化した。従来は外用療法を中心に、抗ヒスタミン薬を補助的に、シクロスポリンを短期的に用いることが多かったが、現在では生物学的製剤や JAK 阻害薬の登場により、中等症から重症例に対しても寛解導入と寛解維持を具体的に目指せる時代となった。一方で、薬剤の選択肢が増えたことは、単に「効く薬を使う」という段階から、「誰に、どの薬剤を、どのタイミングで導入し、どのように継続・減量・中止を考えるか」という新たな課題を生んでいる。

本特集では、アトピー性皮膚炎治療の現在地を、臨床試験とリアルワールドデータ (RWD) の両面から整理することを目的とした。生物学的製剤や JAK 阻害薬については、有効性だけでなく、投与間隔の延長や中止の可能性、効果予測因子、副作用の発症予測と対策、さらに医療経済的視点までを含め、実臨床で治療方針を考える際に必要となる情報を取り上げた。

なお、トラロキヌマブについては、重要な治療選択肢の一つであることに疑いはない。しかし、本特集は RWD や臨床試験データを基に、実臨床で役立つエビデンスを提供することを重視している。今回の構成では、投与間隔の調整、中止、効果予測、安全性管理などを具体的に論じるためのデータの蓄積が十分とはいえないと判断し、独立した項目としては取り上げなかった。

また、外用療法はアトピー性皮膚炎治療の基盤であり、全身療法を導入する際にもその重要性は変わらない。一方で、本特集の主眼は分子標的薬時代の全身療法を、臨床試験と RWD に基づき実臨床へどう落とし込むかにある。外用薬については、この観点から各論として扱うための十分なデータが限られており、使い分けについては著者の経験や考え方が反映されやすい面もあるため、今回は主要な対象から除外した。

今後のアトピー性皮膚炎治療では、短期的な皮疹や痒痒の改善に加え、再燃抑制、治療負担の軽減、長期安全性、医療経済、さらには疾患修飾の可能性までを視野に入れる必要がある。本特集が、日常診療における薬剤選択と長期治療戦略を考えるための一助となれば幸いである。